

名古屋SF読書会 23 2025・12・27

ウは宇宙船のウレイ・ブラッドベリ

名古屋SF読書会URL <https://sciencefiction.ddns.net/sf2/>

【ネタバレあらずじ】(ブラッドベリの場合、あらずじにあまり意味はないことは百も承知ですけれど一応)

ウは宇宙船のウ R is for Rocket (1943)

●学校に通う15歳のクリスとラルフは宇宙飛行士になりたがっている。宇宙飛行士になるには、志願ではなく、宇宙飛行士委員会による選抜を待たねばならない。クリスは化学研究所に勤めていた父を亡くし、母が統計局で働きながらクリスを育てている。ある日、クリスは母から今日は学校に行ってはいけないと言われる。自宅にいと、宇宙飛行士委員会の男がやって来て、クリスが選抜されたことを告げる。年一万人の選抜者のうち、七千人は落伍するため、選ばれたことは秘密にしておかなければならないのだ。クリスはヨーロッパへ留学するかもしれないとラルフに告げ、母はその間、両親がいないラルフを引き取ることになる。別れの日、母は「さよならを言うのは嫌いな」と語るメッセージ・フィルムを残して仕事に出かけ、すべてを察したラルフはクリスをロケット港まで見送り、来週また会おうと声をかける。クリスはフェンスをくぐり抜け、向こう側へ渡った。

初めの終わり The End of the Beginning (1956) 『メランコリイの妙薬』より

●息子が宇宙飛行士として宇宙へ旅立つ夜、その両親が自宅で話し合う。なぜこういうことをするのかと母が尋ね、父はこれが「初めの終わり」なんだと答える。重力の時代が終わり、人間は永遠に進み続けるのだ、と。しかし、母は納得できない。無事ロケットは飛び立ち、父は庭で芝刈り機を押す。『小さな車輪をまわすのは信仰、大きな車輪をまわすのは神の恩寵』という歌を彼は思い出していた。

霧笛 The Fog Horn (1951) 『太陽の黄金の林檎』より

●陸から2マイル離れた岩礁に灯台がある。管理人として灯台に来て3か月のジョニーと何年も過ごしているマクダン。11月の晩、マクダンはジョニーに不思議な話を語る。毎年この時期になると、灯台を訪ねてくるものがある。寂しい霧笛の音が、そいつを呼び寄せているのだと。語っているうちに、海から黒っぽい大きな頭が現れ、怪物が姿を見せる。百フィート近い体長、ばかでかい目。怪物は霧笛に響いて鳴く。マクダンが霧笛のスイッチを切ると、怪物は立ち上がり灯台を前肢でつかんで揺らす。二人は何とか地下室へ脱出し、灯台は崩れた。怪物は霧笛の音を繰り返して一晩中鳴いていた。翌年灯台は新設され、11月が再び来たが、怪物は二度と姿を見せなかった。マクダンは言う。「この世には愛しすぎちゃいけないものがあることを学んだんだよ」。ジョニーは霧笛を聞きながら、何かいいたくてたまらない気持ちになった。

宇宙船 The Rocket (1950) 『刺青の男』より

●フィオレラ・ボドニは廃品置き場でこつこつ働き三千ドル貯めたが、火星ロケット一人分のお金にしかならない。五人の子供と妻も含めてくじ引きをするが、皆譲り合って決まらない。仕事場でロケット船の実物大模型を二千ドルで手に入れたボドニは、火星への旅へ連れていくと伝え、子供たちをその模型に乗せる。火星に行く光景を映したカラー・フィルムを見て七日間過ごし、家に戻るボドニたち。「いつまでも覚えているよ。絶対に忘れない」と子供たちは言う。本当にロケットを飛ばすと思込んで反対していた妻も最後には「あなたは世界一の父親よ」とささやいた。

宇宙船乗組員 The Rocket Man (1951) 『刺青の男』より

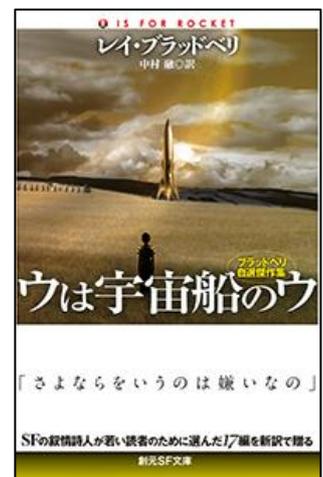
●グリーン・ヴィレッジに住む母子のところに宇宙船乗組員の父親が帰って来る。息子のダグラスは父親の制服をこっそりと見て、火星のにおいや星々のにおいなどを嗅ぎとる。母親は父親を引きとめるためにとびきりの料理をこしらえたり、協力をダグに求めたりするが、なかなかうまくいかない。これが最後だと言って父親は宇宙に行き、宇宙船が太陽に墜落して死んでしまう。父親が亡くなった星は見たくないと言っていた母親は、長いあいだ昼間は家の中にいて、散歩に出るのは雨の日だけだった。

太陽の金色のりんご The Golden Apples of the Sun (1953) 『太陽の黄金の林檎』より

●宇宙船〈黄金の杯(コパ・デ・オロ)〉号(またの名を〈プロメテウス〉あるいは〈イカロス〉)で太陽へ向かう男たち。宇宙に方角はないのだが、「南へ」と船長は言う。宇宙服の欠陥により一人犠牲者を出したものの、何とか太陽のエネルギーを手に入れ、帰途につく。つぎはどこへ行くのか。「北だ」と船長はつぶやいた。

雷の音 A Sound of Thunder (1952) 『太陽の黄金の林檎』より

●タイム・サファリ株式会社が運営する時間旅行で、恐竜の時代にやって来た観光客たち。〈通路〉からそれたり、許可の出していない動物を撃ったりしてはいけない、と言われたにもかかわらず、エッケルズは〈通路〉を離れ、一頭のチョウを踏みつけて殺してしまう。戻って来た世界は以前と変わってしまっていた。



長雨 The Long Rain (1950) 『刺青の男』より

●金星に降りしきる長雨の中、太陽ドームを求めて中尉とその部下、合わせて四人の男が歩き続ける。川を渡り、千本脚の怪物と闘う。一人を怪物の電撃で失い、残った三人が太陽ドームにたどり着くが、誰もおらず、食糧はダメになっていた。海から上がってきた金星人に襲われたのかもしれない。三人は次のドームを目指す、雨の中、上を向いたまま動かない部下の一人をもう一人の部下が射殺してしまう。二人はさらに歩き続け、ようやく太陽ドームにたどり着いた。

亡命者たち The Exiles (1949) 『刺青の男』より

●2020年頃、地球ではハロウィーンやクリスマスが禁止され、ポオ、ストーカー、シェリーなど、あらゆる怪奇文学、幻想文学の所有が禁じられた。地球を追われた書物の作者と登場人物は、火星でひっそりと暮らしていた。しかし、2120年、地球からのロケットが火星に向かってくる。地球人が火星に到着すると、作者や登場人物たちは皆滅んでしまうだろう。地球人の到着を阻止すべく、三人の魔女は呪いを唱え、ポオとピアスはディケンズに協力を求め、様々な方法を試すが、どれもうまくいかない。ついに宇宙船は火星に到着し、しかも運んできた古い書物（歴史博物館に保存してあった最後の一冊）を皆焼いてしまう。乗組員が火星に降り立つと、そこにはもはや誰もいなかった。

此の地に虎あり Here There Be Tygers (1951)

●第84星系第7惑星へ宇宙船が調査のためにやって来る。手入れされた緑の芝生に穏やかな天候。調査隊の一人が風に乗って飛翔する。全員が空を飛び、小川に流れるワインを飲んで上機嫌となるが、疑い深く好戦的なチャタートンは一人だけ、この惑星は自分たちを罠にかけようとしていると言う。チャタートンがドリルを惑星に突き立てると、タールが嘔き出してドリルを飲み込む。夕方、チャタートンは姿を消し、ネコ科動物の体臭が残っていた。美しい女たちの幻影を見て隊員たちはここに残りたがるが、船長は帰還を決意する。しかし、一人だけ残った男がいた。彼を待つ運命は果たして……。

いちご色の窓 The Strawberry Window (1955) 『メランコリイの妙薬』より

●ボブとキャリー夫妻は、子供たちとともに火星に移住してきたが、なかなかなじめないでいる。しかし、地球に戻るわけにはいかない。何かにつかしいものが欲しいと考えたボブは貯金をすべて下ろして、地球から昔のものを取り寄せた。古いポーチ、ブランコ、籐の揺り椅子、中国の風鈴、そして、いちご色の窓。ボブは言う。このささやかな見慣れたものさえあれば、火星が変わるのを見守り、生まれたときから知っていたように火星を知ることになるだろう、と。

ドラゴン The Dragon (1955) 『メランコリイの妙薬』より

●夜の荒野で鎧を着て剣を持った二人の騎士がドラゴンの到来を待っている。数マイル先から咆哮が聞こえ、ドラゴンが近づいてくる。馬に乗り、槍をもって立ち向かうが、一瞬にして撥ねられ、轢きつぶされる。ドラゴンとは、汽笛を鳴らして疾走する夜汽車であった。

贈りもの The Gift (1952) 『メランコリイの妙薬』より

●2052年のクリスマス・イブの日、火星行きロケットの中でクリスマスを祝おうとした家族はツリーを税関で没収されてしまった。父親は子供に宇宙空間を見せる。数知れぬろうそくがまたたく宇宙は、巨大なクリスマス・ツリーだった。

霜と炎 Frost and Fire (1946)

●一万日（約27年半）前に宇宙船がある惑星に墜落し、放射線によって人間の寿命が八日間となった。低い山の上には動作する宇宙船が一隻あるが、遠くて辿り着けない。太陽が暑すぎるため、人々は洞窟で暮らし、走って30分以内の距離しか移動できないのだ。シムは生まれて二日目にライトと出会い、三日目に科学者と語りあい、四日目にはカイアンとともに戦争に行き、シムとライト。雨による川の流れに乗って山のそばまで辿り着き、ついに船の中に入る。四日経ったが、二人は若いままだった。シムは崖に戻り、百人の男を宇宙船に連れて帰る。宇宙船が発射し、ついに悪夢は終わった。

アイナーおじさん Uncle Einar (1947) 『10月はたそがれの国』より

●翼を持ち、空を飛べるアイナーおじさんは、数年前の〈一族〉の〈集会〉のあとに帰る途中、高圧線に触れて墜落し、ある女性と出会った。手当てをしてもらったが、翼の遠隔知覚力が消え失せ、夜中に空を飛べなくなってしまう。帰郷をあきらめて、その女性と結婚し四人の子供を授かる。あるとき、その子供たちが凧あげをしようというのにヒントを得て、自分も凧のふりをして飛ばせよのだと気づいたアイナーおじさんは、昼間に空高く飛べるようになったのだ。

タイム・マシン The Time Machine (1955) 『たんぼぼのお酒』17章

●フリーリー大佐のところへ出かけて話を聞くダグラス、チャーリー、ジョンの三人。1910年の魔術師チン・リン・スー、1875年の大草原を駆け抜けるバイソンの群れ、南北戦争の思い出。大佐そのものが、生き生きとした過去をよみがえらせるタイム・マシンだった。

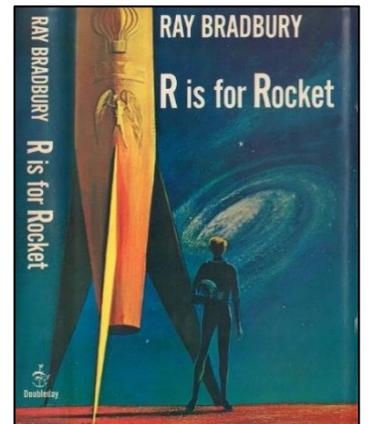
駆けまわる夏の足音 The Sound of Summer Running (1956) 『たんぼぼのお酒』5章

●6月、ダグラスは新しいスニーカーが欲しかった。9月には新しいテニス・シューズの魔法はなくなってしまう。去年の靴ではだめなのだ。靴を買いに行くが、1ドル足りないのだから、靴屋の主人サンダースン老人に仕事と引き換えに靴を売ってもらおうと頼みこむ。取引は成立し、靴を履いたダグラスはカモシカかガゼルのように駆け出していった。

ブラッドベリ短篇集リスト

Dark Carnival (1947)

- 『刺青の男』(1951) 小笠原豊樹訳／ハヤカワ・ファンタジイ→ハヤカワ文庫NV→ハヤカワ文庫SFフ16-5
『太陽の黄金の林檎』(1953) 小笠原豊樹訳／ハヤカワSFシリーズ→ハヤカワ文庫NV→ハヤカワ文庫SFフ16-3
『10月はたそがれの国』(1955) 宇野利泰訳／創元推理文庫SF→中村融訳／創元SF文庫
『メラニコロイの妙薬』(1959) 吉田誠一訳／早川書房
『ウは宇宙船のウ』(1962) 大西尹明訳／創元推理文庫SF→中村融訳／創元SF文庫
『よろこびの機械』(1964) 吉田誠一訳／ハヤカワSFシリーズ→ハヤカワ文庫NV
『万華鏡』(1965) 川本三郎訳／サンリオSF文庫
『スは宇宙(スペース)のす』(1966) 一ノ瀬直二訳／創元推理文庫SF
『キリマンジャロ・マシーン』(1969) 伊藤典夫・他訳／早川書房→ハヤカワ文庫NV(二分冊)→改題『歌おう、感電するほどの喜びを!』ハヤカワ文庫SFフ16-8(『ブラッドベリは歌う』中村保男訳／サンリオSF文庫)
『黒いカーニバル』(1972) 伊藤典夫訳／ハヤカワSFシリーズ／日本オリジナル→ハヤカワ文庫NV→ハヤカワ文庫SFフ16-6
『十月の旅人』(1974) 伊藤典夫訳／大和書房／日本オリジナル→ハヤカワ文庫SFフ16-9
『とうに夜半を過ぎて』(1976) 小笠原豊樹訳／集英社→集英社文庫→河出文庫
『火星の笛吹き』(1979) 仁賀克雄訳／徳間書店／日本オリジナル→徳間文庫→ちくま文庫
『恐竜物語』(1983) 伊藤典夫訳／新潮文庫
『悪夢のカーニバル』(1984) 仁賀克雄訳／徳間文庫→改題『お菓子の髑髏』ちくま文庫
『二人がここにいる不思議』(1988) 伊藤典夫訳／新潮文庫
『瞬きよりも速く』(1996) 伊藤典夫・他訳／早川書房→ハヤカワ文庫SFフ16-4
『バビロン行きの夜行列車』(1997) 金原瑞人・他訳／角川春樹事務所
『社交ダンスが終わった夜に』(2002) 伊藤典夫訳／新潮文庫
『猫のパジャマ』(2004) 中村融訳／河出書房新社→河出文庫
『永遠の夢』(2007) 北山克彦訳／晶文社



スタッフ&ゲスト紹介

名古屋SF読書会は初心者からマニアまでをモットーにやさしく丁寧、かつ面白い読書会を目指しています。今後もしょくをお願いいたします。(文責・渡辺英)

長澤唯史 @Sonopapa

相山女学園大学教授。著作に『70年代ロックとアメリカの風景』(小鳥遊書房/2021年)。

渡辺英樹 @gonza63

愛知県春日井市で11月よりSF資料館を開館しました。よければお越しください。

舞狂小鬼(洞谷)

SF、幻想小説、海外文学など何でも読みこなす読書家。作家ではレムとストルガツキー兄弟とバラードと泉鏡花が好き。ブログ「お気らく活字生活」継続中。

渡辺睦夫

海外SFファン。好きな作家はC・スミス、J・ティプトリー・Jr.、B・ベイリー、M・コーニイなど。洋楽ファン。好きなジャンルはパワー・ポップ、オルタナ・カントリーなど。

渡辺啓一 @eleking

大学時代にSF研に在籍して基本を学び、あとはのんびりSFと付き合っています。

中村融／なかむらとおる(翻訳家)

中央大学在学中より海外SFの研究、評論、翻訳など幅広い活動を行う。1987年にジャック・ヴァンスの「五つの月が昇るとき」で翻訳家としてプロデビュー。以降、新作の翻訳紹介、古典の新訳、SF/ファンタジーのアンソロジー編集など、多方面で活躍中。

名古屋 SF 読書会

初心者からマニアまでをモットーにやさしく丁寧、かつ面白い読書会を目指しています。

<https://sciencefiction.ddns.net/sf2/>

【今までの課題本】

- 2014・11・22/ル・グイン『闇の左手』
- 2015・2・15/バスター『虎よ、虎よ!』
- 2015・7・26/ブラッドベリ『華氏451度』
- 2016・1・23/イーガン『ゼンデギ』
- 2016・4・29/ハインライン『宇宙の戦士』
- 2016・7・30/ベイリー『カエアンの聖衣』
- 2016・11・23/レム『ソラリス』
- 2017・4・30/ノース『ハリー・オーガスト、15回目の人生』
- 2017・8・5/ティック『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』
- 2017・12・2/伊藤計劃『ハーモニー』
- 2018・4・29/オールディス『地球の長い午後』
- 2018・7・21/小松左京『日本沈没』
- 2018・12・22/ウィングダム『トリフィド時代』
- 2019・4・27/山田正紀『宝石泥棒』
- 2019・8・3/クラーク『2001年宇宙の旅』
- 2019・12・22/劉慈欣『三体』
- 2021・10・3/劉慈欣『三体Ⅲ』(オンライン)
- 2024・6・30/飛浩隆『グラン・ヴァカンス』
- 2024・10・6/ウィアー『プロジェクト・ヘイル・メアリー』
- 2025・3・8/アシモフ『鋼鉄都市』
- 2025・6・21/ギブスン『ニューロマンサー』
- 2025・9・27/春暮康一『一億年の望遠鏡』
- 2025・12・27/ブラッドベリ『ウは宇宙船のウ』
- 2026・4・18/未定